第２部

ミッチーの物語

～ボランティア・コーディネーター編～

第２部では、ある女性コーディネーターの体験から、団体としての災害支援のあり方を探ります。

◆◆◆

被災地へ送られる救援物資や押し寄せるボランティアの窓口になったのが、“災害ＮＧＯ”と呼ばれる市民団体でした。

一日も早い暮らしの再建を望む被災者の声を聴き、仕事の内容を決め、必要なボランティアを派遣する。それは簡単な作業ではありません。さまざまな思いを胸に被災地を訪れるボランティアの人たちをコーディネートするのは、時に「組織活動」と「個人の意思」の衝突を招きました。「善意」を有効に活かす態勢作りの必要性が、かつてないほど迫られたといえます。

また、支援活動の長期化は、「いつまで、どこまで関わればよいのか」という課題を被災地で活動するボランティア団体に突きつけました。震災における「引き際」の重要性は、これからも災害救援団体の教訓として語られるでしょう。

ミッチー」
本名、北村道子。東京都在住の独身28歳。
海外協力関係のNGO職員。前職は保母。
ボランティア歴10年。

※各章の物語は、阪神・淡路大震災におけるボランティア活動の検証をもとに構成された架空の物語です。

STORY 1 突如！災害！出動！

コーディネーターとして現場を見なければわからない…。ミッチーは迷わず神戸行きを決断しました。

「これはいったい何だろう？」。1995年1月17日朝、何気なくテレビをつけたミッチーこと北村道子は驚いた。アナウンサーは緊迫した声で、関西地区で大規模な地震が起きた、と繰り返していた。あまりの光景に呆然としていると、電話のベルが鳴り始めた。勤務するボランティア団体の先輩からだった。被災地の救援活動について緊急会議を開く、という。急ぎ都心の事務所に向かうと、会議はすでに始まっていた。しかし、具体的なことを決めるには、あまりにも情報が不足していた。被災地の状況をよく知る必要があった。関西地区の知人から情報収集を始めるとともに、調査隊が早速現地入りした。現場から携帯電話が入り、「被害がひどく、高齢化率の高い兵庫区か長田区に拠点を置く。現地に長期滞在できるスタッフが必要だ」と報告した。「北村さん、行ってくれるね」。指名を受けたミッチーはうなずいた。見知らぬ土地で、何からどう手をつければ……。すべては行ってみないとわからない。混乱の中、不安と当面の生活物資を積み込んで、車は神戸に向かった。

①●あなたが調査隊に参加するとしたら、何を重点的に調べますか。
②●被災地で活動を始めるまでにどんな準備が必要だと思いますか。
③●あなたは被災直後の時期にはどんな活動が最も重要だと思いますか。

◆解説と提言

田尻佳史(日本ＮＰＯセンター、大阪ボランティア協会)
●震災当時「被災地人々を応援する市民の会」で一般の人々が被災地でのボランティア活動が実施できる体制を作るため、西宮、芦屋、東灘区で現地ボランティアセンターを開設。被災された方々の自立に向けた動きの応援を行った。

ボランティアセンター立ち上げのポイント

ボランティアセンター立ち上げには、まず団体として何ができるのか、目指す使命(ミッション)は何なのか、またその活動の効果等を予測、判断した上で行動することが望ましい。もちろん緊急時にこれら全てを判断し動くのは難しいものの、ただ無造作に動き回るのではなく、一定の進むべき方向性を決めて行動しなければ、活動の効果を上げることはできません。

次に、ボランティアコーディネーターのノウハウを持った人員配置が必要となります。このコーディネーターは、さまざまなニーズ把握を行い、活動に結び付けていくことが求められます。もっとも、災害時の混乱の中でのニーズ把握は困難ですが、このニーズ把握が上手くできなければ、トラブルが発生したり、混乱を生み出す結果にもなります。したがって、コーディネーターの役割は重要です。

ニーズ把握の内容は、①自分達の団体活動が地域に必要とされているか？地域の自発的主体的な動きの邪魔になることにならないか？などの社会的ニーズの把握、②行政窓口や現地のボランティアセンターにヒアリングなどをして、ボランティアの協力を必要とする人の個別ニーズの把握、そしてもう一点大切なのが、③ボランティアのニーズの把握が必要です。なぜ、災害時の救援活動にボランティアのニーズ把握が必要なのかと思われる方がおられるかもしれませんが、活動の現場において直接的な活動を展開するボランティアの自発的な思いを大切にすることが、被災者の立場に立った活動の展開に繋がるからです。

また、ニーズ把握には広い視野を持って、冷静に判断することも求められます。そのためには、他団体との連携や情報交換なども充分に行わなければなりません。

このようなニーズの把握を行う一方で、情報の整理と活動方針(方向性)の検討を行い、具体的な活動展開のための体制を整える必要があります。

◆一口コラム　六甲山を越えて、おにぎり隊が行く

神戸市北区藤原台おにぎり隊ママさん

●1月18日／近所の親しい人から電話が入り「昨日、身内を助けるために灘区まで行ってきた。今日、できる範囲で、おにぎりなどを集めて持っていくから、協力してほしい」とのこと。すぐさま炊飯器のスイッチを入れ、育児サークルのメンバーや近所の人などと連絡を取る。子どもを家に待たせ、近くの公園に各自おにぎりを手に集まる。

藤原台は神戸の北の端だが、六甲トンネルを抜ければ、普段は灘まで30分弱の距離。当時交通事情は最悪で、車を出すことは逆に、必要な救援の妨げにならないかという意見も出た。「でも、でも、今おにぎりを運べるのは、この距離にいる私たちにしかできないことかも知れない」という思いが、みんなを動かしていた。持参した灘の区役所では、「食べるものが届いたのははじめてです」「まだ、あったかいぞう!!」と歓声が上がった。

●1月19日、20日／集まる人も物資も増えた。おにぎり、ゆで卵、つけもの、インスタント食品、みんな同じ立場の子連れの人が気になるとみえて、オムツ、ミルク、ナプキン、ベビーカー……みるみる集まった。キャンピンググッズを積み込む夫たちの姿も。

３日たって、かなり大きな組織が動きはじめたので、小さい救援物資を運ぶために車を出すのは迷惑になると判断。あとは各人によるボランティアに形を変えていった。

(『子連れママのべんりＢＯＯＫ』より要録)

STORY 2 ボランティアセンターの立ち上げ

チラシまき、聞き取り調査、災害弱者への対応、活動の決定、お金・物資・ボランティアの募集、地元との連携……際限なくある「仕事」が一気に押し寄せます。

「やるんならどうぞ」。市役所の職員も疲れているのは分かるが、ボランティア団体のことなどマニュアルにもないのだろう。連携のかけらも感じられない。「こちらは、組織的に動けるんだし、もっとあてにしてくれてもいいのに」。肩透かしを食った思いで、事務所に戻った。事務所では、スタッフと中心メンバーのボランティアが被災地での聞き取り調査の結果をもとに、とりあえずの活動の方向性を決めていた。活動地区と拠点を決め、対象としては"災害弱者"と呼ばれる高齢者、障害者、在日外国人、子どもなどに重点を置いた。ニーズは際限なくある。チラシをまいて被災者の方からの御用聞き、配給の弁当も冷たいので炊き出し、必要に応じて避難所へのボランティア派遣など、具体的に手をつけられることから取り組みながら、「次の活動を展開しよう」という意見で一致した。また、他のボランティア派遣団体に募金や必要物品の呼び掛けとボランティアの募集、情報発信を頼んだ。現場の対策本部は活動の調整とボランティア受け入れを主な仕事とすることで割り振りを決めた。地元との連携もかかせない。地元青年会議所や商工会議所の青年部のつてをあたったが、「それどころではない」と断られた。まずは、単独で活動しながら、様々な団体との連携を考えることになった。

①●活動拠点を決めるにあたって、どのような点に注意したらよいと思いますか。
②●活動拠点には、どのような備品・消耗品が必要だと思いますか。
③●活動拠点を運営するには、どのような体制・連携が必要だと思いますか。

◆解説と提言

宮坂勝彦(SUPPORT KOBEながの／代表)
●被災地復興の後方支援活動を展開。災害時対応の迅速化をめざし、被災地で必要とされる衣類を中心に、寄付によって集められた日用品などを常時備蓄する一方、換金できるものは換金し、ボランティア活動の支援資金にあてている。

信頼関係を確立し、温かい血の通いあう連携を

後方支援活動はボランティアの希望、現地からの要請を的確にとらえる視点が必要とされます。

災害発生当初は人命最優先の観点から現地の判断を待ち、その間にボランティア・スタッフが、必要とされるヒト、モノ、カネを、必要な時に発送できるよう、目的別に分け、内容を記すなどし、輸送基地に集めます。活動拠点(事務局)と輸送基地は同じか、近い場所を探します。物資輸送には運送会社や運送ボランティアスタッフを確保します。輸送に関する現地情報、郵便局等の地元便も活用します。

災害支援活動全体の把握と信頼関係構築のため、現地の受け入れ団体、支援グループとの話し合いが欠かせません。互いの活動スタイル、考え方、それに相性なども考慮し、それぞれの動きに見合った各団体との連携を深め、ヒト、モノ、カネの窓口を開きます。窓口を一本化するのか、多極化するのかは柔軟に考えます。

現地からのニーズ(*1)をきめ細かく満たすためには、生の声を聞き、現在の状況を的確にとらえられなければなりません。そのためには、現地と後方との血の通った温かい人的・組織的信頼関係の確立が必要です。こうした信頼関係をつくりだしていく上からも、災害時だけでなく日頃からの情報交換、人的な交流などが大切になります。

(*1)必要とされていること、要望。

●プールを台所として使用

◆一口コラム

吉田公男(ハートネットふくしま／代表)
●郡山市阪神大震災ボランティア派遣委員会として、西宮市-高齢者専用避難所「かぶと山荘」、ケア付き仮設住宅「学文殿公園地域型仮設住宅」、神戸市-兵庫県ボランティア協会、各避難所等に介護ボランティア等を派遣。

遠くからできること

ハートネットふくしまは、災害時の障害者・高齢者の支援を半年間続けました。1週間1班3人のローテーションで1班10日間、移動日を除き、1日は引き継ぎのできる体制をとりました。

現地では毎日のニーズの対応に追われ、マイノリティー(＊1)への対応などは見えにくくなるもの。遠隔地から客観的に見た方が長期的に必要なものが何なのかを冷静に判断できるのかもしれません。逆に、現地との連絡、安全の確認、宿泊場所の確保、食事の問題、派遣経費など問題も多く、派遣を開始できたのも約2か月後の3月12日でした。

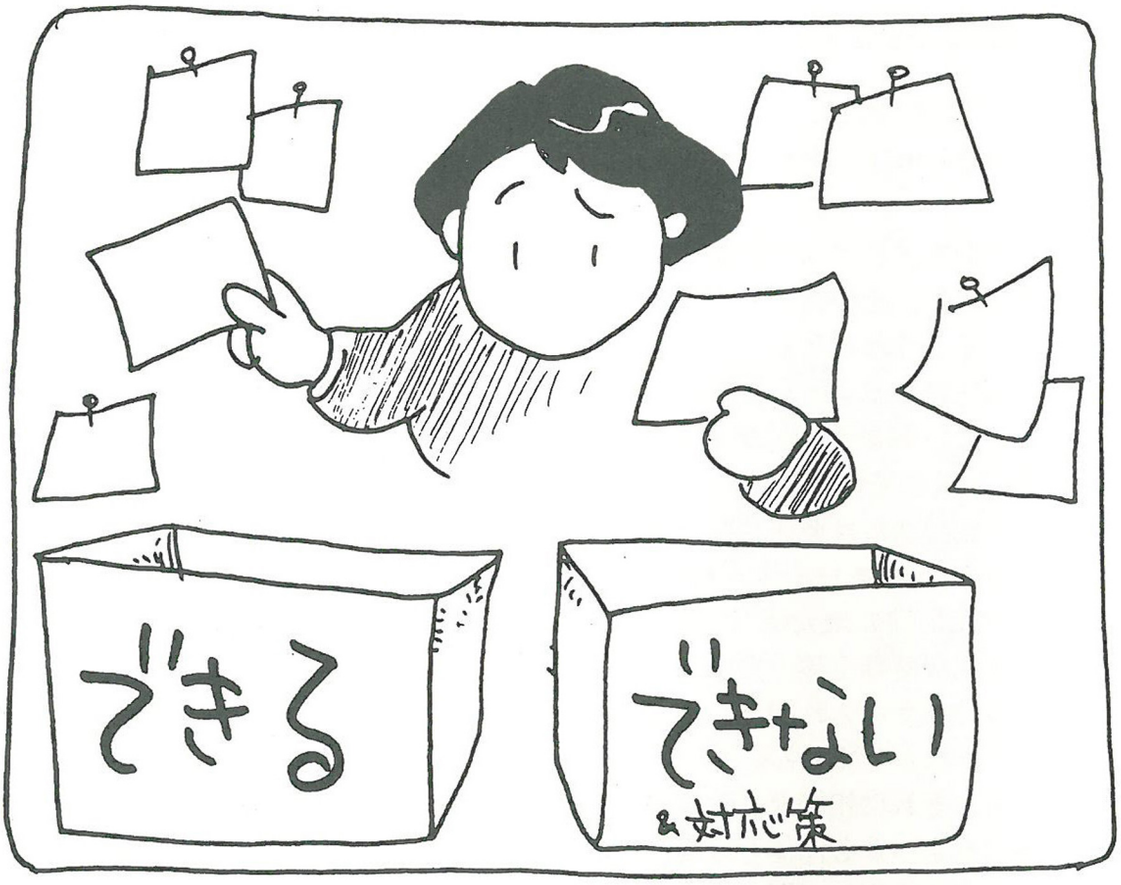
活動は高齢者専用避難所と、ケア(＊3)付き仮設住宅の介護ボランティアを継続して33週間、延べ1000人送り続けました。しかし、それを支えるためには事務局スタッフ、活動支援金募金活動、派遣者の職場である福祉施設での代替ボランティア等、後方支援活動には更に多くの市民が参加し、市民のネットワークに支えられた災害支援活動でした。

(*2)障害者、外国人など少数とされる人たち
(*3)介助などのお世話

コーディネーター・ミッチーの物語

STORY 3 際限ない被災者からの要望

「ボランティアは何でもする人？」
要望に応えようとすればするほど、
ミッチーの悩みは続きます。



「親戚のところに避難しているあいだ、家の見張りをしてほしいって言う人がいるんですけど」。“御用聞き”と称した、被災者のニーズ調査から戻った学生ボランティアが言った。「それで？」。「なんでも受けるということでしたから、一応…」。活動を始めてから1週間。御用聞き－ボランティア派遣体制は何とか動き出したが、問題も増えていた。被災者の一部に、ボランティアは何でもやる人というイメージができ、「こんなことが」というものまで頼まれるようになってきていた。例えば、店の掃除、パチンコ屋のゴミ処理。ボランティアが商売の手伝いをするのか、という疑問の声もあがった。その一方で、「電気・ガス・水道も復旧していない家にひとりで暮らすおばあちゃんの様子を見てきてほしい」など、本当に差し迫った話もあった。震災によるもの、震災前の課題が深刻化したもの、震災とは関係のないもの、様々な要望やSOSが雪崩のように押し寄せてきた。きちんと対応しようとすればするほど、悩みがつきない日々が続くのだった。

①●被災者からの要望を集めるには、どのような方法が考えられますか。
②●あなたが被災者に要望の聞き取りを行なう場合、どんなことに注意したらよいと思いますか。
③●被災者からの要望は、どのように取捨選択していけばよいと思いますか。

◆解説と提言

池田啓一（都市生活現地復興センター）
●震災当時、芦屋市民学生救援隊で、救援物資の配布やボランティア・コーディネートを担当。

本当に迷っているならば、わだかまりを持ちながらとりあえずやってみろ!

医療・援助のプロならば、例えばケースワーカーは医療行為をしないなど、業務活動の範囲が決まっています。これに対して、ボランティア活動の範囲には厳格な基準がないことが多く、「どこまですべきか？」「何をすべきか？」の判断を巡る混乱がよくあります。このことは、ただ「活動範囲をきっちり決めておけばよい」というだけでは済まない大きな問題をはらんでいます。

ボランティアは行政や専門職の下請けではありません。言い換えれば、行政や専門職を「援助」することがボランティアの最終目的ではないということです。災害ボランティアに話を限れば、ボランティアの援助対象は被災者であり、その目的は被災者の生活復興に「つき合うこと」にあると思います。

しかしボランティアは滅私奉公ではありません。普段から人は自分の「なりわい」（「かせぎ」としての仕事）によって社会参加（モノやサービスを売る）していますが、「なりわい」による参加は多くの場合間接的（顔が見えない）で、しかもそれで得た金銭は原理上、共有（必要なものを、必要なときに、必要な人に）できません。

これに対して、「もうひとつの社会参加」としてボランティア活動は積極的で主体的な意義を持っています。それは「社会への直接参加の実感」（ふれあいの中で、私と相手が共にかわる）が得られるということに他なりません。

さて、災害の様相は時間の経過とともに変化しますし、災害の種類や地域の違いなどによっても異なります。生活の必要といっても、物資、労力、こころのケア、法制度の変更、など色々な事柄が必要になるでしょう。実際、阪神・淡路大震災の現場ではそうでした。ですから「ボランティアがどこまで関わるのか」という問いに答えるためには、「被災者の生活につき合うこと」と「直接参加」との原則を大事にしながら、「被災者の生活の今の課題は何なのか」を大いに議論するほかないと私は考えています。

●食事の配布準備をする。

◆一口コラム

齋藤信夫（日本青年奉仕協会）
●東京で街頭募金などの支援活動を展開する一方、西宮市、芦屋市、神戸市東灘区、灘区を中心として市民公開型ボランティアセンターを開設し、臨機応変な活動を行った。

被災地だけが現場ではない

誰もが被災地を目指して出かけようとする。震災の支援を希望するたくさんのボランティアが協会の扉を叩いた。このエネルギーを東京で生かすために、活動資金を調達する街頭募金をはじめた。段ボール箱を利用しての募金箱作り、被災地でのボランティア活動を紹介するパネルづくり、街頭募金の許可（募金許可と道路使用許可）手続きなど、２週間もするとどこの警察が許可を取りやすいか、募金はどの駅が集まりやすいかなどのノウハウを蓄積した。こうして約300万円を現地に送ることができた。

さらに、大学生はちょうど受験シーズンであったことから、事務所のあるオリンピックセンターは受験生村になっているので、被災地の受験生のお兄さん・お姉さん活動を始めた。受験大学の学生が会場の下見の案内や話し相手をつとめ、心づくしの弁当の差し入れを行った。ボランティアの活動の場は被災地以外にもあることを彼らは証明したのだ。

STORY 4 コーディネートの大変さ・重要性

「コーディネートは重要」、だが、今の被災地にはそんな余裕はない。どうすればうまくいくのか。ミッチーは途方に暮れてしまいました。

「人形劇ができるんですが、どこかでできませんか？」「被災した子どもの面倒を見たいんですが？」ひっきりなしに外部からの問い合わせが殺到する。被災した子どもの遊び場をつくったとたん、何か子どものためにやりたい人が殺到してくる。ボランティアはみなそれぞれに、何かをやりたい、特技を活かしたい、と思って被災地に駆けつけてくる。でも、その気持ちを形にする場を作る人間がいなければ、どんな知恵も技術も活かすことはできない。どこで・誰が・何を・どのくらい必要としているのか。それを調べ、つなぎ、コーディネートして、はじめてボランティアの力を活かすことができる。昨日のことだ。20歳の男性ボランティアがくやし泣きしながら帰ってきた。「力仕事なら任せておけ」と言うので、ある施設のガレキ撤去に行ってもらった。ところが、行ってみると仕事はほとんどなく、職員の犬の散歩までさせられたという。普段なら、こまかな打合わせをしてから活動してもらう。だが、今の被災地にそんな余裕はなかった。殺到するボランティアを被災者のニーズにほぼ機械的に割り振る。それだけで精一杯だった。

考えてみるゾウ

①●通常時と災害時のコーディネートには、どのような違いがあると思いますか。
②●災害時のボランティアコーディネートで、特に大切なことを3つ挙げてください。
③●災害時に備えるため、通常時のコーディネートではどんなことに気をつければよいと思いますか。

◆解説と提言

村井雅清（被災地ＮＧＯ協働センター／代表）
●被災地内外をベストにジーパンというスタイルで駆けめぐり続けているハダシのお父さん。「人間しとって良かった」と震災より感動し続け、その感動を現実のものとしてこの社会に反映させていこうと燃える48歳。

コーディネーターは野球で言えば監督と同じ!

ボランティアに専門性が必要だとは必ずしも思わない。むしろ専門家（医者・看護婦・ケースワーカー等）がどれだけボランタリーになれるか？が重要。実際ＫＯＢＥにかけつけたボランティアの６割が過去にボランティア経験がない人たちであった。しかしその中には専門家よりも素晴らしい働きをしたボランティアは少なくない。誰でも活動の内容によって得意・不得意はある。コーディネーターは適材適所を早い時期に見抜くこと、野球に喩えれば監督業だと思う。もし失敗しても、いつまでも気にしないこと。ただし同じ過ちを二度・三度と繰り返さないこと。

さて災害初動期の活動では、限度はあるがボランティアが余りすぎて困るということはない。ただし派遣する側は現場の判断と指示に従うことが第一条件。でなければ前線基地と後方支援の関係はうまく行かない。現場のリーダーは被災直後に被害実態の把握はもちろん、救援体制のボリューム（人・物・金・拠点整備）、活動内容と期間（立ち上げから撤収まで）を短期間で判断し、決定しなければならない。

とにかく他者から『学ぶ』という姿勢があればうまく行く。ボランティアは何事に対しても『気づく』ということが大切であると思う。

●最後の配給。

◆一口コラム

長谷部治（長田区社会福祉協議会）●震災当時、長田ボランティアルームでボランティアをコーディネート

志願からコーディネートへ

長田ボランティアルームでは、初期から志願制を採用していた。緊急救援時はボランティアが初対面同士でお互いの能力、技術、活動期間等コーディネートする上で必要な情報を知っているのは他でもなくボランティア自分自身だったからである。

この方式では、比較的自分が選択した活動を行うため積極的な活動が実施されるが、ボランティア自身、思いが強すぎて『免許習得以来初めてマニュアル車（＊1）に乗る』など「やりたいこととやれることの違い」をきっちり認識できない場合があり、トラブルが発生することが多い時期があった。しかし、そういったトラブルもコーディネートの確立後は少しずつ順調になり、志願を受け付ける前にすべてのニーズを提示したり、難ケース（＊2）には長期のボランティアをコーディネーター側から指名したり、継続ケースは同じ人が活動するなど少しずつ解消されていった。組織として全体を管理するコーディネーターとボランティアが自分自身をコーディネートすることが緊急救援時は大切だろう。

(*1) マニュアル・トランスミッション＝手でギア入れ替えのレバーを動かす車
(*2) 事例、取り組む事柄

STORY 5 ボランティアのボランティア

裏方のボランティアは必要です。しかし、なり手がいません。

「えーっ、ボランティアって、避難所でお年寄りに食事とかお茶を配るんじゃないんですか」。驚きの声をあげたのは、物資整理の担当に回された若い女性だった。「まただ」とミッチーはうんざりした。物資の仕分けや食事の支給など、いわゆる後方支援活動に回されたボランティアの中からは、必ず不満の声があがる。読み上げていた割当表からミッチーが顔を上げると、納得のいかない表情のボランティアは何人もいた。「私、避難所のおじいちゃんやおばあちゃんの悩みとか、辛かった話を聞いてあげたいんです」「私は被災した方々のお役にたつため、来たつもりなのに。ボランティアを支えるボランティアって何なんですか」。気持ちは分かる。しかし、だれかが後ろで支えなければ活動そのものが成り立たないのだ。ミッチーは何とか彼女たちをなだめて現場へ向かわせた。徒労感に襲われた。いつまで、こんな説得を繰り返さなければならないのだろう。どうすれば、みんな納得してくれるのだろう。

考えてみるゾウ

①●ボランティアを支えるボランティアとして、災害時にはどういうことが必要になると思いますか。
②●宿泊ボランティアの受入れの是非について、あなたはどう思いますか。
③●現場のボランティアと後方のボランティアの温度差をどのように解消すればよいと思いますか。

◆解説と提言

福田和昭（被災地ＮＧＯ協働センター）
●震災当時は地元の茨城県で「つくば震災ボランティア連絡会」を結成し、後方支援活動を実施。その後1997年5月より阪神・淡路大震災仮設住宅支援ＮＧＯ連絡会（現：被災地NGO協働センター）スタッフ。

まわり道でも伝わる想い

一口に災害救援のボランティア活動といっても、想像以上に様々な仕事が発生します。

被災者からの要望やボランティアの希望者を受けつけるには電話番が必要です。救援物資を配るなら、物資を仕分けして整理して、数を確認しなければなりません。ボランティアが大勢いるのなら、食事の準備や宿泊の手配も必要です。支援金や救援物資を頂いたら、領収書やお礼状を出すのが礼儀かも知れません。

これらはみな、直接被災者に関わることのない仕事です。でも電話番をしている人がいるから、他の人が物資を配ったり、炊き出しをしたり出来るのです。

ただやみくもに物資の仕分けをしているだけでは被災者の方々の顔は見えません。でもちょっと視野を広げてみてはどうでしょう。モノを直接手渡すことができなくとも、そのモノを通して、仕分けの作業は被災者の方々に届いているのです。

被災者に接する現場のボランティアは、こうした裏方のボランティアに支えられながら活動を行っています。また現場・裏方を問わず被災地で活動しているボランティアも、遠方からお金や物資や情報の支援をして下さる方々によって支えられています。

支え合いの輪の中で、自分にできること・求められていること。ちょっと立ち止まって考えてみてはいかがですか。

◆一口コラム

上原泰男（連合東京／福祉局長）●地震当日から連合東京内の支援体制の整備、街頭カンパ活動、現地救援隊の組織化を開始。1月27日より連合東京現地救援隊として活動。2月中旬から長田区鹿取救援基地の設営支援および中期支援システム設計に着手。

救援システムと機能分担について

発災直後に神戸では地元と県外支援者とで現地対策本部が設立され、県外ボランティアの受け入れ体制の確立が急がれ、その受け入れ規模は毎日数百名を想定するため、宿舎・食事・生活用品・活動に必要な資機材の確保、そして、なによりも被災地のニーズとボランティア・パワーとのマッチング(*1)、更にはそれを支える財政とシステム確立等々の課題克服が急務となりました。毎日数百名の県外ボランティアが各種ニーズに対応しますが、様々な課題が日々発生しました。これらは常に瞬時に解決が求められることばかりでした。生活対策を含め、後方支援を担当する者は数十名を必要とし、この者たちは直接被災者と接することはなく、現地で不眠不休の活動を続けることが求められました。

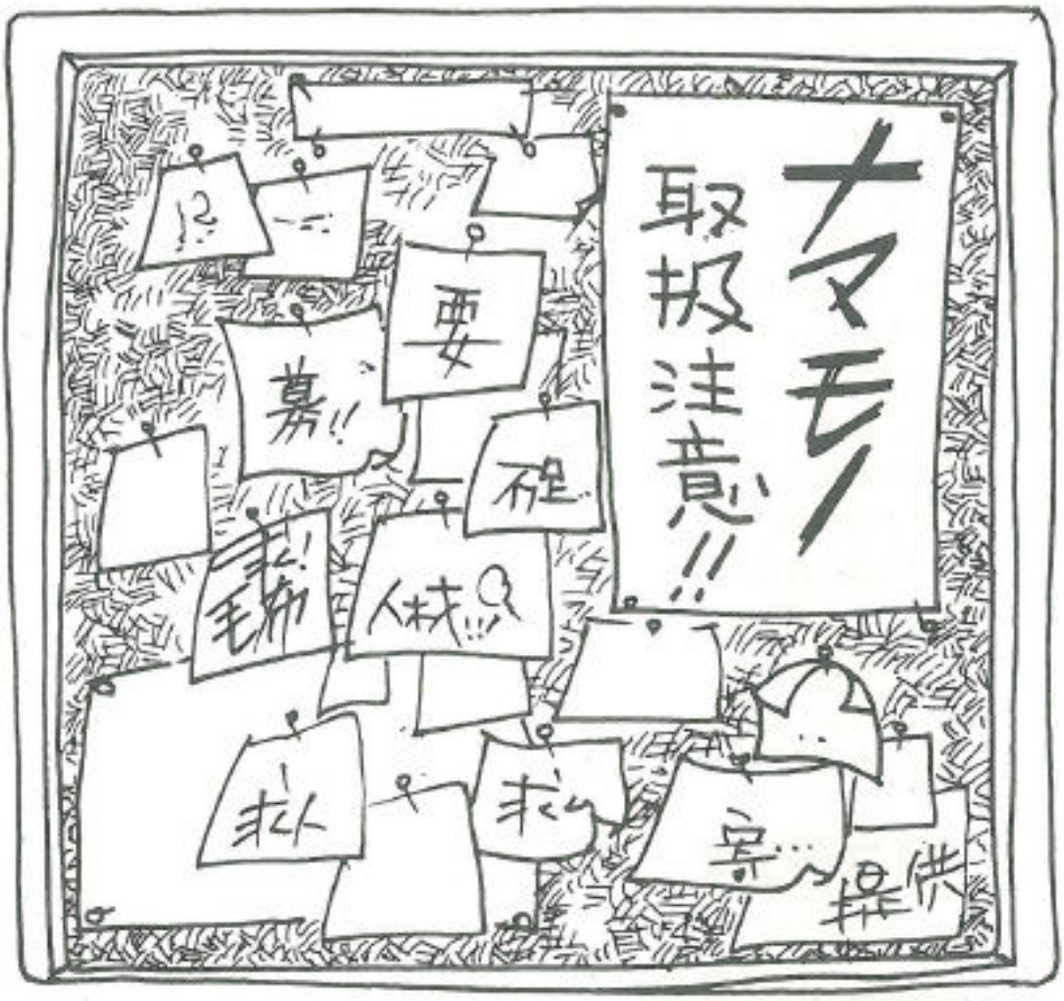
組織的な集団として被災地救援活動を展開する際には、つねに具体的活動を展開する者と、これを後方で支えるものが一体となってはじめて有効な救援活動が成立すると思えます。

(*1)的確な組合せ

●1階駐車場

STORY 6 ニーズは変わる

ニーズは刻々と変わってく―。
氾濫する情報に
ミッチーは混乱しています。



「これは余ってるって」。そう言いながら、ボランティアの青年は毛布の山を片づけ始めた。避難所の毛布が足りない、と申し込みがあったのが昨夜。それなら、と救援物資の毛布を避難所に届けたのが今朝。しかし、もう不要だという。ミッチーは倉庫の中のレトルト食品や古着の山に目をやった。スーパーや商店が営業を再開し、ほとんど必要のないものになっていた。物資だけではない。ボランティアも毎日、数十人の申し込みがある。善意は無駄にしたくない。どこかでボランティアを求めている、と情報が入る。行ってみると、用が済んだ後だったり、人手が余ってたり、ひどいときはまったくデタラメだったりする。一方で、助けを求めることもできず、苦しんでいる人がいる。一つ一つ確認を取ればよいのは分かっていた。しかし、そんな余裕はない。続々と届く救援物資の山を見ながら、ミッチーは途方に暮れた。

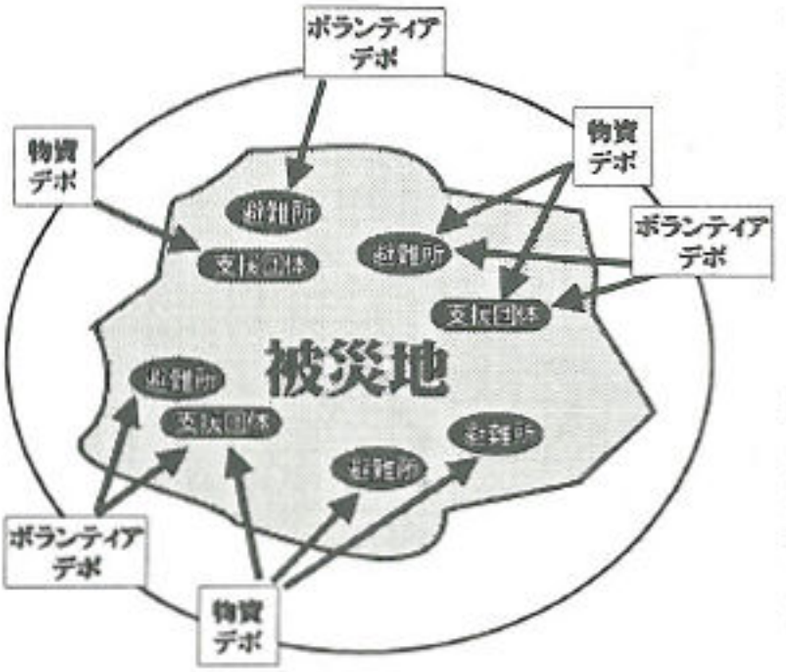
①●"必要と言われて、持っていくともういらなくなっていた"このような状況はどうしたら防げると思いますか。
②●刻々と変わるニーズをできるだけ的確に把握するにはどうしたらよいと思いますか。
③●必要なものを必要なときに調達し、提供するためにはどのような情報発信体制を取ったらよいと思いますか。

◆解説と提言

中村順子(コミュニティーサポートセンター神戸／代表)
●東灘区地域助け合いネットワーク代表幹事として、避難所以外の救援にかかわる総合コーディネートを行う。

モノやヒトは直行方式から迂回方式に

避難所や現地の支援団体は、直接物資(モノ)やボランティア(ヒト)が流入すると、過不足の混乱は避けられません。また、当事者は善意に弱く、無駄や不要とわかっていても断りきれないのが人情です。そこで、モノやヒトといったん別の場所にストックし、ニーズに応じて効果的に供給することが望ましいと思います。



被災地に近く、交通の便のよい所に物資やボランティアのデポ(＊1)を即時にたちあげ、現場からのモノやヒトの要望に対応します。デポは被災地の周辺に数か所、物資デポとボランティアデポは区分します。ボランティアは、現場に入る際の注意事項や必要知識、保険加入などオリエンテーション(＊2)を行い、現場の団体の負担を軽くします。デポ間どうしの連絡は、朝・夕2回携帯電話や無線機で行い、調整をはかります。外部からは、少なくともデポを通じてニーズの確認をします。

現場とデポの連絡は、御用聞き隊が毎日定時に現場(避難所や団体)を訪れ、ニーズをデポに持ち帰ります。このように、いったいストック(＊3)してから状況に応じて現場対応する迂回方式で、気持ちや物資がスムーズに流れると思います。

(＊1)蓄積場所、備蓄基地　(＊2)説明会　(＊3)蓄積

◆一口コラム

田村太郎(多文化共生センター)
●震災当初は「外国人地震情報センター」。多言語での情報提供を目的に、「多言語ホットライン」の運営や健康診断会の実施、通訳派遣などを行なう。1995年10月に改称。現在は被災地に限らず、幅広く在日外国人との共生をめざした活動を展開している。

日々変化するニーズに対応するには?

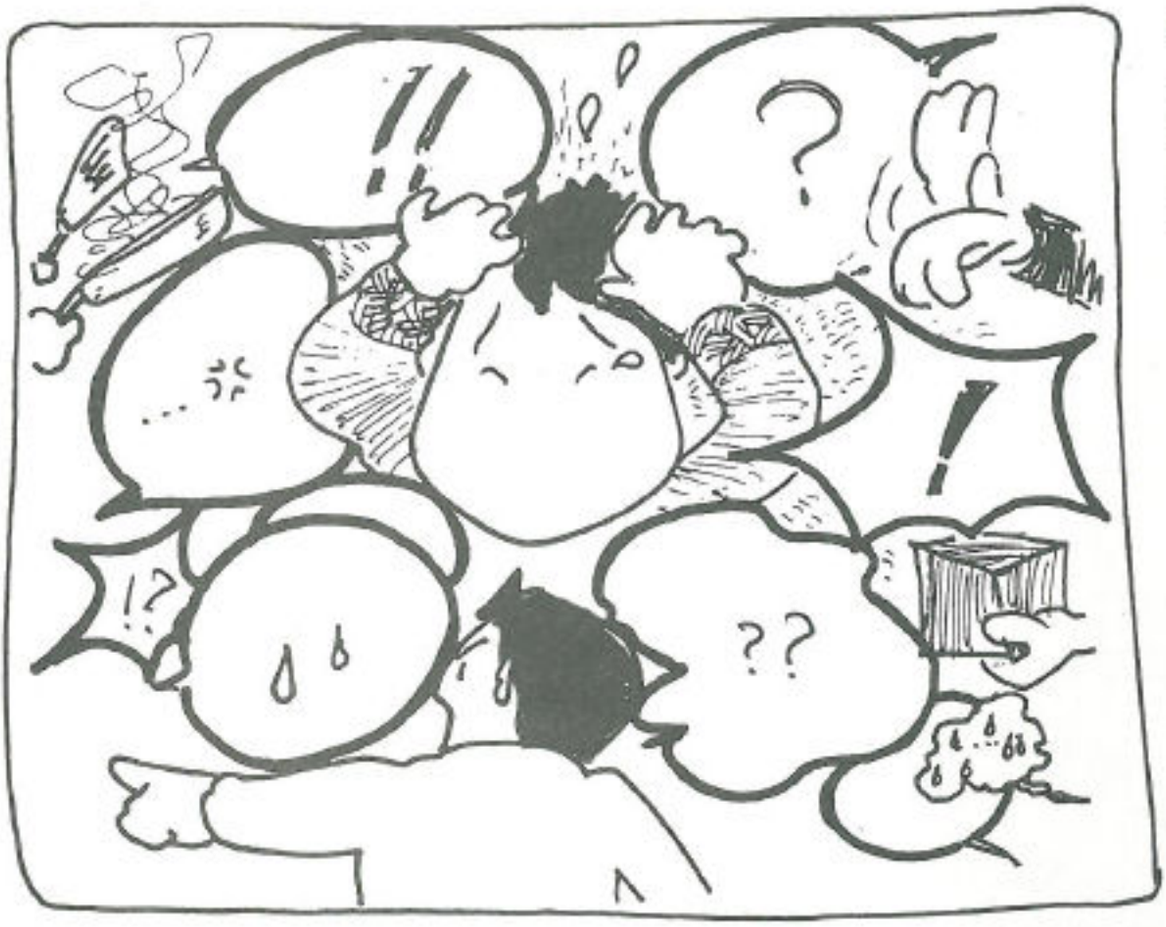
被災地には約8万人の外国人が暮らしていて、そのうち約2万人が日本語を話さない人たちでした。ただ単純に、日本語しかなかった震災に関する情報を多言語で伝えたい、という思いから設立されたのが「外国人地震情報センター」でした。実際、震災直後は交通機関や避難所に関する情報へのアクセス(＊1)が多かったのですが、次第に保険に加入していない場合の医療費の問題など、外国人固有の問題に関する相談が多くなり、「いま足りないものは何か」をさきまわりして考えざるを得ない状況になりました。電話相談が活動の中心でしたので、相談内容を分析し、ボランティア間のケースシェア(＊2)を頻繁にすることで、ニーズの変化に対応しました。現在も震災の枠を越えて幅広い相談を受けていますが、ニーズは変化する、という前提にたった活動を心がけています。

(＊1)近づくこと、捜し出して入手すること
(＊2)事例、課題を分担、共有すること

コーディネーター・ミッチーの物語

STORY 1 コーディネーターの涙

ボランティアの要求の板挟みになるのが、コーディネーターの宿命だとわかっていても……。



「北村さん、八百屋さんが集金に来てますけど」「北村さん、洗濯機が一台壊れちゃったんですけど」「北村さん、新聞社の人が取材したいんですって」「北村さん、近所の人が何か怒ってますよ」「北村さん、明日のそうじ当番なんですけど、だれかに代わってもらえませんか」「北村さん、コピー用紙がなくなっちゃった」「北村さん、お醤油がないよ」「北村さん、あたしもう電話番いやです」。北村さん、北村さん……。地震から1ヵ月半。専従スタッフ3人で運営する現地事務所はボランティア受け入れのピークを迎えた。所長として対外折衝と本部との調整をする先輩スタッフ、ボランティアのコーディネートと事務所の運営を担当するミッチーと後輩の男性スタッフ。人当たりの良さから、いつのまにかミッチーがボランティアの世話係になっていた。若者たちの要求、雑事、トラブルには際限がなかった。このままでは自分がつぶれてしまう……。ミッチーは人知れず、寝袋の中で涙を流すようになった。

①●何をどこまでするのがコーディネーターの役割なのでしょう。
②●ミッチーの苦しみを和らげてあげるには何が必要だと思いますか。

◆解説と提言

清水慈子（静岡県ボランティア協会・市民活動サポートセンター）
●震災当時は、シャンティ国際ボランティア会・現地事務所でボランティアコーディネートから様々な雑事まで幅広く担った。

タフな黒子たち

今思えば、阪神・淡路大震災時、ボランティアコーディネーターは本当に大変だったのだ。活動拠点を立ち上げ、被災地の人々のニーズを受け止め、ボランティアを受け入れて活動に送り出し、時にはケアし、他団体や行政との連絡調整に奔走していた。休む間もなく仕事をしていながらあちこちから文句を言われ、心身共に相当な疲労とストレスを感じていたはずなのに倒れなかった驚異的な姿が目に浮かぶ。そんなコーディネーター役を、災害時には誰もが担う可能性を持っている。経験豊富なコーディネーターでさえ大変な状況の下、私たちがその役目を担うことになったとき、いかに役割を分担して動けるかということは大切なポイントだ。仕事はもちろん、心の負担も分け合える仲間の存在が、よりよいコーディネーターとしての働きに結びつくのではないだろうか。

震災後、多くの方からさまざまなことを学ぶ機会を得た。その中で、有効なボランティア活動を展開するための黒子の役割を果たすのがコーディネーターであること、被災地もボランティアもひっくるめて全体を客観的に見渡せるバランス感覚が必要であることを知った。さらには、判断力や決断力、観察力、冷静さ、タフな(*1)心身、人を使う力、人脈等々。そうしたものは急に身につくものではない。日々の仕事や活動を通じ、あるいはシュミレーション(*2)や実体験をしていく中で、自分なりに養っていくしかないのだと思う。コーディネーターは大変だ！

(*1)逆境などに強いこと　(*2)想定演習、模擬実験

●津波で打ち上げられた海草。

◆一口コラム

喜多村慎子（シャンティ国際ボランティア会）
●地震直後の２月上旬から４月中旬まで、兵庫区、長田区の拠点で活動を行う。主な役割は、①ボランティアコーディネーター、②他団体との連携のための調整、③兵庫区荒田仮設住宅ふれあいセンター運営委員、そして④拠点事務所の賄いねえさん。

スタッフ・ボランティアの悶々…?!

ボランティアが悶々とした状況に陥るのは当たり前。それだけにボランティアはコーディネーターにはけ口を求めてくる。「スタッフは神戸や被災者をどう思っているのか」「実際に現場で被災者と接しないスタッフに何がわかるのか」などなど。「私だってみんなと同じ！！」と叫びたいが叫ぶことができず、ボランティアの話を聞き、ボランティアが寝静まった頃スタッフミーティングをする毎日。新人スタッフだった私は、ボランティアにアドバイスといった大それたことはできず「正直に気持ちを伝えいく」「一緒に考えているんだ」といった姿勢を見せていきながら、今スタッフとしてボランティアに対し「出来ることと出来ないこと」「したいけどやれないことなど」を伝えていった。しかし、疲れにかまけて伝える作業を怠っていると、大抵この様に不満台風の卵が発生していた。衝突して、涙して、笑って、その繰り返しが経験を積むことなんだと学んだ日々だった。

STORY 8 ボランティアの心のケア

毎日の活動をしながら、ストレスがたまっていくボランティア。どこかでガス抜きが必要です。

「あの人たち、まだ話し合ってますけど。明日大丈夫なんですか」。緊張して眠れない、と言いながら夕方九州から到着したばかりの女子学生が事務室に入ってきた。ミッチーは日誌を付ける手を止めて顔をあげた。昼間はばらばらに活動するボランティアたちが明かりを落とした食堂で、車座になっていた。このやり方にはきっかけがあった。何もかもうまくいかなくて、辛くてどうしようもなくなったとき、ミッチーは思い切って休みを取り、京都の友人を訪ねた。友人はただ黙って、ミッチーの話を聞いてくれた。心が軽くなっただけでなく、すべてを一人で抱え込もうとしていた自分に気付いた。自分は、単に事務所を訪れるボランティアより、コーディネートの知識と経験が多いに過ぎない。それから、ミッチーは夜のミーティングの後、ボランティア同士で気持ちを分かち合う時間を取るようにした。消灯までの数時間は、みんなにとって最も大切な時間のような気がする。

①●一日の活動を終わくくるミーティング。どのようなことを話し合う必要があると思いますか。
②●ボランティアにも心のケアが必要です。「心のケア」とは何でしょうか。
③●ふさぎ込んだり、いらだっているボランティアの話しを聞いてあげるとき、どんなことに注意したらよいと思いますか。

◆解説と提言

大江浩（神戸ＹＭＣＡ国際センター／所長）●震災直後は、三宮ＹＭＣＡを中心として救援活動及び後方支援活動を行い、震災後約１年以降は災害救援者の心のケアに関するワークショップ、震災を契機に浮き彫りとなった様々な社会的な課題を共に考えるワークショップやＣ.Ｉ.Ｓ.Ｄ（Critical Incident Stress Debriefing）を啓発するための教材ビデオの作成などを中心に活動を続けている。

ボランティアの心のケア～ディブリーフィングの必要性

震災後、多くの救援ボランティアや救助（危機介入）に当たった専門家が、ある時期を経て（わき目も振らずに救援活動に従事した後）、「燃え尽き症候群」に陥った。ボランティアをする側・される側がお互いの「過剰依存」にぼろぼろになっていった光景もあちこちに見られた。「弱音を吐くな」「がんばれ」「前向きに生きよ」の一言の下に、日本社会の全体ガンバリズムの中で押しつぶされていった人々である。強い使命感には、自分の限界を超えて働き過ぎてしまったり、自分の心身の状態を無視して無理をしてしまい、結局は「挫折感・無力感・自責の念」に苛まれるという悪循環が待っている。震災後１年して、神戸市の当時の助役さんが自死したことは、その意味でとても衝撃的な出来事だった。

Debriefing（ディブリーフィング）とは「思いを包み隠さず打ち明ける・報告する」という意味で、米国では「災害に関わる人は、その人自身もケアされるべき存在である」との考え方から、救援活動に携わる人たちが「自分が経験したことを吐露しあう」形で日常的かつ組織的に実施されている。具体的には、①Debriefingの紹介、②起こった事実の客観化、③体験の際に自分が考えたこと、④その状況下での自らの感情、⑤ストレス反応への気づき・症状の有無、⑥体験からの学び、⑦日常への復帰の７段階を踏んで、災害後のストレスの軽減が図られる。

理不尽な出来事によってかけがえのない人を失った人は、その喪失体験から絶望の淵へと導かれる。しかし、その心の傷を持った人により添う人も実は深く傷ついていることがある。誰もが支えられ、癒されるべき存在なのだ。

災害の後、最も大切とされる「三つのT」がある。T = Tears（涙）、T = Talk（語ること）、T = Time（時間）である。涙を流し、つらさ、悲しみを分かち合い、時間をかけて癒していくこと。どんな災害にも、誰（被災者・援助者）にでも通じることに違いない。

◆一口コラム

広瀬満和（日本災害救援ボランティアネットワーク）●震災当時は西宮ＹＭＣＡ救援センターで、ボランティアリーダー会ディレクター、被災児童のためのキャンプ企画・運営担当。

いいかげんになろう

災害の現場では、被災者はもちろんのこと、救援ボランティアも一種の興奮状態にある。そのため、思いが勝ちすぎて事の本質を見失ってしまうことがしばしば起こる。

学生のＮ君は、被災者の話を聞いてあげることが心のケアになると聞き、勇んで仮設へ出かけていったが、ほどなくシュンとして帰ってきた。「おじいちゃんに怒られた」という。独りで暮らすお年寄りを訪問したが、何も話してくれない。挙げ句の果てに「おまえに話すことなんかあるかい！」と怒鳴られたそうだ。「僕もう明日から、来ません」

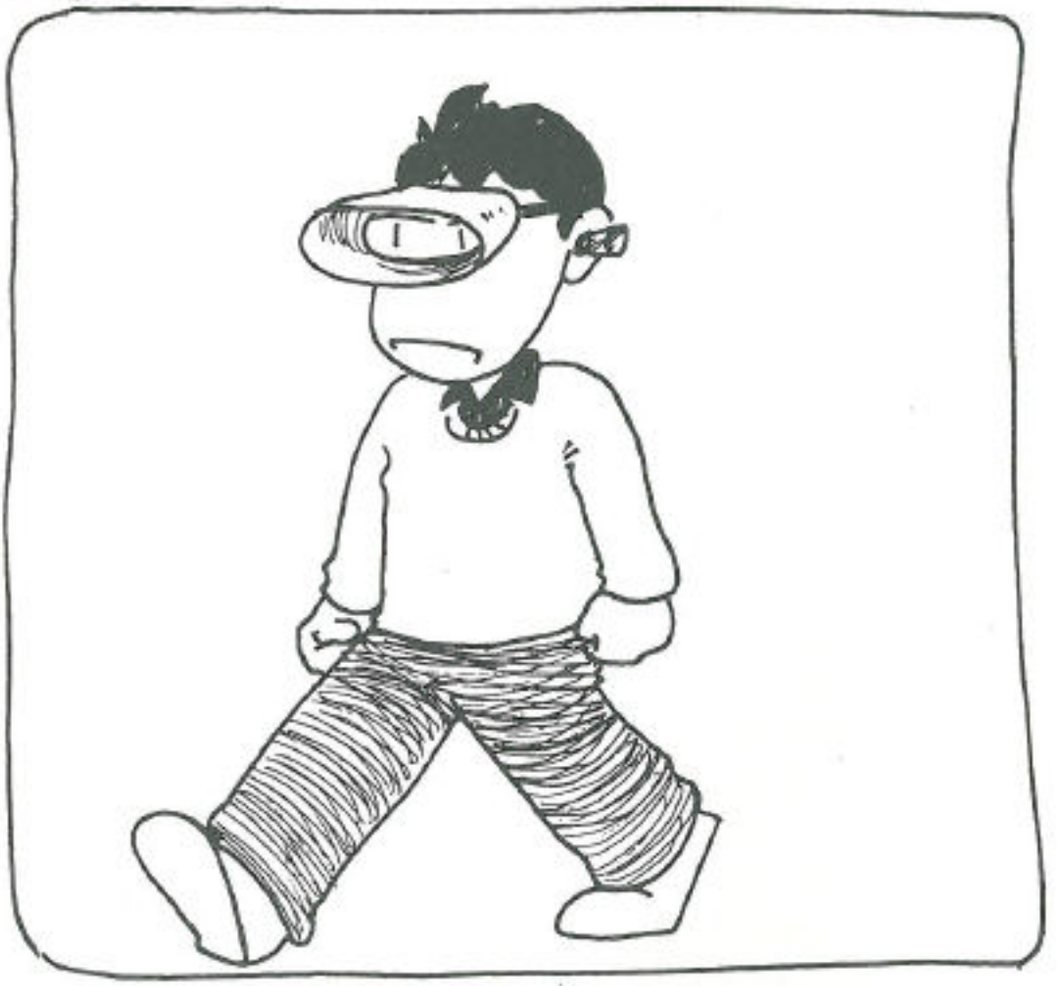
その夜、Ｎ君と遅くまで話し込んだ。ボランティアをしようと思った自分の気持ち、被災者がおかれている状況、おじいちゃんはどうして何も話してくれなかったのか、怒鳴ったとき本当はどんな気持ちだったんだろう。いろんな思いを胸に、Ｎ君は帰っていった。

被災者は100％保護されるべきもので、ボランティアは100％役に立たなきゃいけないというのは危険な思い込みである。被災した者も救援側に回った者も同じ生活者であるという原点に帰ることで、力のいれようが「好い加減」になる。そんなバランス感覚が欲しい。

ちなみに翌朝、元気な顔でお年寄りの家に向かうＮ君の姿があった。

STORY 9　非日常におちいるボランティア

現実から離れてしまうボランティア。ミッチーは頭を悩ませます。



「なに考えてんですか、あの連中は。すぐにやめさせてください」。真夜中に怒鳴り込んできたのは１週間ほど前から滞在している学生ボランティアリーダーだった。彼は、いつからか“ピンク小屋”と呼ばれるようになった資材倉庫のことを言っていた。「あんなことをしてたら、なんのためにここに来てるかわからないじゃないですか。被災者は今も苦しんでるんですよ」。「そうね……」ミッチーはため息を漏らした。恋愛に走らないまでも、極端な言動やかたよった考え方にとらわれるボランティアが増えていた。いつか手を打たなければとは思っていた。しかし、朝から晩まで、日常からかけ離れた緊張の中で、心の安らぎや自分自身の確かな存在感を求める若い男女の気持ちを考えると、強いことが言い出せずにいた。「わかりました。明日、みんなにきちんと話しをします」ミッチーは言った。活動が終わったとき、彼らがすんなりと現実の生活に戻れるように軌道修正をするのも自分の役目なのかもしれないと、ミッチーは思った。

①●非日常の中でボランティアに自分を見失わないでいてもらうためにはどうすればよいと思いますか。

◆解説と提言

関尚士(シャンティ国際ボランティア会)
●2月上旬から3月中旬まで、兵庫区内のお寺を拠点にボランティア・コーディネート、関係機関との連絡調整、ネットワークの立ち上げなどを行っていた。

誰のための活動なのか、いま何をすべきなのか

●勉強を教えるボランティア。

震災後間もない日の真夜中過ぎに神戸に足を踏み入れ、翌朝、周辺の状況だけでも把握しようと一人いくつかの避難所をまわった。その時の思いは言葉では言い尽くせない。崩れかかったビル、倒壊した家々、避難している人たち。すべての蓄えと共に家を焼きつくされ、頼れる肉親も身近にいない老人。力ない瞳に"いのちの灯火"を思った。

その日から、100人前後が常に出入りするボランティアの配置と自治体や他のボランティア・グループとの情報交換・調整に追われた。何よりもつらかったのは、現場から帰ってくるボランティアの話を聞くことだった。人々の苦しみやつらさを毎日目の当たりして、一人の人間として心から涙し「何とかしたい」と思う人たち。その思いが時として、彼らを自分たちの世界へと引き込み、周りを見えなくさせてしまう。そして本人も気づかぬうちに、独善、独走、周囲からの孤立、過剰な思い入れ、批判、陶酔、自責の念、無力感を形成していった。

やり場のない思いは、スタッフや現場で活動する他のメンバーに当てられた。その時コーディネートスタッフとして自分が彼らに言えたことは、ひとつだけだったような気がする。「もう一度僕らが何のためにここ来ているのか考えよう。僕らがどういう姿で被災した人たちや仲間と接するのが一番良いのか、今何が一番求められていることなのか、距離を置いて考えてみようよ」

被災地は、ひとつの極限環境と言える。極限状態にあって、冷静な自己を持ち続けられる人間は少ない。同じ目的、同じ場を共有する者同士が、独りよがりになっていないかどうか、日常的、定期的に自己点検を促し合うことが何よりも必要なことであるように思う。

◆一口コラム

ボランティアこぼれ話 ～微笑ましいヤツ、涙ぐましいヤツがいた!

震災がつなぐ全国ネットワーク会議から その2

(P11から続く) **次に石井事務局長はピンク色の紙を全員に配った。「じゃ、次はこんな変わった人もいたんよ、というボランティアを紹介してください。少しきわどくてもいいですよ」。全員が、一瞬、宙に目を走らせ、サラサラとペンを走らせ始めた(会議もこうスムーズに運べば、と事務局長は思っていたにちがいない)。ご紹介できるお話のいくつかです。**

◆「ゆっくり考えてくる」と言ってボランティアセンターを出て、大阪までパチンコに行った○×△のリーダー。(あなたも人間だったのですね)

◆自分が食事をするのが何か申し訳ないと、栄養不足で働けなくなったヤツがいた。

◆とある男性ボランティア。夜、ちっとも眠らないと思ったら、せっせとラブレターを同じボランティアに書き綴り、結局ふられた。その後、彼は宗教に目覚め、数珠を購入するも、ある朝、トイレで大便とともにその数珠を流してしまい、Wパンチで絶望のどん底を味わった。

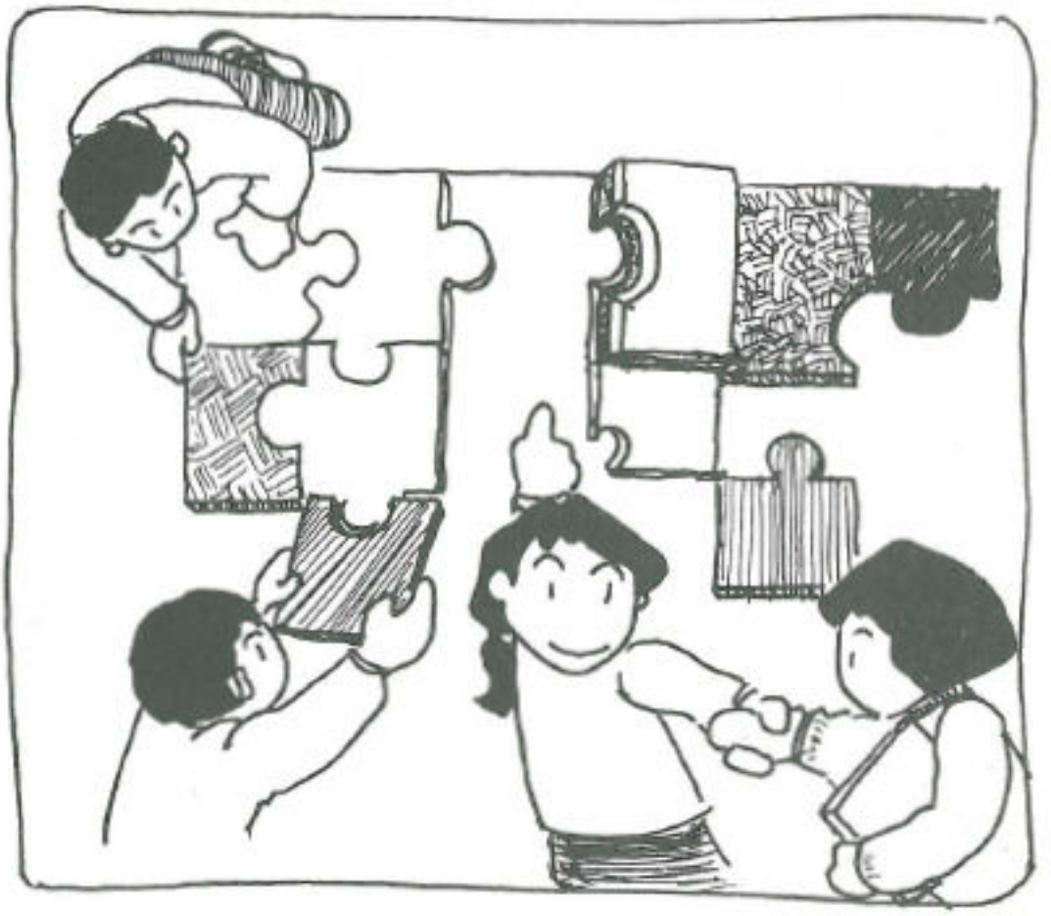
◆震災結婚も多かったが、すでに離婚したカップルもある。(災害時の恋愛は成り立たない?)

◆逆算すると、どうもあの頃の神戸で、子どもを作っていたカップルがいた。

◆ソープランド街で、「福祉プロ」がオープン、学生ボラがよく通っていた。(サービスはないが無料だった)

STORY 10 緊急救援から生活復興支援へ

これからがボランティア活動の正念場です。



「行政がボランティアの受け入れを中止するようだ」。先輩スタッフの言葉に、ミッチーはハッとした。確かに被災地を訪れるボランティアの数もピークを過ぎた。新学期とともに学生ボランティアのほとんどはここを去る。ボランティアの受け皿として存在した団体も、資金調達の難しさから活動中止に追い込まれつつあった。しかし、ボランティアはまだまだ必要だった。仮設住宅や公営住宅に移った高齢者や障害者の問題、それに避難所もまだ残っている。全国には、支援活動を続けるボランティアグループも多く存在していた。「残ってるところで、全部やれってことかしら」。「結局、そういうことだろう。行政は再開発や基盤整備に忙しくなっている。いつまでも人手と場所を割いて、通常の業務に穴をあけられないんだよ」。夏までには、避難所も閉鎖されるそうだ。「俺たちも体制を見直さないとな」。先輩スタッフがつぶやいた。ミッチーはだまってうなずくと、事務所を出た。更地の広がる街に、重機の音が響いていた。「建て直すことだけが復興じゃないのにな……」。そんな思いにかられた。

①●活動の規模や態勢を見直すとき、あなたなら何をポイントに見直しを行いますか。
②●絶対に必要なことと思っても、それが自分たちの手におえないとき、あなたならどうしますか。
③●"復興"とは何でしょうか。

◆解説と提言

伊永勉（災害救援研究所／所長）
●震災直後に西宮ボランティアネットワークを立ち上げ、災害救援ボランティア・コーディネート、行政との協力体制などを先駆的に確立。

被災者の自立がボランティアの社会復帰のきっかけ!

災害救援ボランティアとは、発災後の第2フェーズ(応急対応期)則ち被災者の自立生活が困難な時期を支援する活動を指している。分かりやすく分類すると、避難所生活を余儀なくされる時期の活動といえる。特に被災地外から救援に駆けつけたボランティアは、仮設住宅への転居など避難所が解消される時点が撤退のタイミングであり、ボランティア活動が根本的に変革する時となる。

応急対応期のボランティア活動は、被災者個々に対するニーズに応える活動と、地域の様々な作業を支援する活動に大きく二分されるが、復旧が進むにつれて徐々に被災者からのニーズも減少し、個人的な生活に対する支援から、地域のまちづくりへと支援内容が増加してくる事になる。仮設住宅での生活が中心になるにつれ、独居老人や生活保護世帯への支援など個別の対応に従事するボランティアも、地域に根づいたコミュニケーションが重視され、誰でも良いというわけにはいかなくなる。

同時に専門知識の必要な活動が増えてくるとともに、従来の福祉団体が地域内で活動を再開する時期ともなるため、被災地外から駆けつけたボランティアの大半は帰還するきっかけとなる。ボランティアの撤退は単に被災者の自立を促進するためだけでなく、ボランティア本人の社会復帰ケアにとって重要な条件である。「私がしなければ」「可哀相だから」といった熱い想いに駆られて、行動を起こしたことは貴重な経験となり、将来の人生にもきっと役立つと思われるが、ある時期を期して自分の生活に戻らなければならない。また、このボランティア活動を通じて得た様々な経験を、自分の生活環境において役立たせることが、本人にとって最も価値ある財産としてほしい。災害援助ボランティアを日常に組織化する必要はなく「居てほしい時君が居て、来てほしい時君がくる」が災害時のボランティアへの期待ではないだろうか。

●ボランティアの心のケア。（「声かけ班」ミーティングで）

◆一口コラム

「記録室」から「情報室」へ

実吉威（市民活動センター・神戸／代表）
●震災当時、京都府美山町から神戸入りし、阪神大震災地元NGO救援連絡会で半年間事務局スタッフとして活動。その後、震災・活動記録室の代表。98年に震災しみん情報室と改称、更に99年市民活動センター・神戸となった。

震災後に盛り上がったボランティア活動の実状を歴史に残そうと「震災・活動記録室」という名で始めた私たちの活動(95.3～)は、その後変遷を経て、96年夏から98年春までは4次にわたる「復興住宅募集」での被災者への情報提供(住宅周辺マップや電話相談など)が大きな仕事でした。当時、このような情報が切実に求められていたからです。この春からは、この地域の市民活動団体のサポートや基盤整備をテーマに、被災地の課題の共有のための場「エイドの会」の開催、行政(県・市)への提言や復興・市民活動情報誌「みみずく」の発行、また個別の団体の相談に応じたりといった活動をしています。震災から学んだ最大の教訓は、災害時だけではなく、日常的に、地域に市民活動がどれだけ根付くか、それが社会の豊かさを決めるということ。そのサポートの機能に徹しようということです。私たちは規約や運営委員会などをもたず、よくいえば柔軟に活動を変化させてきましたが、基本テーマが上のように明確になるに従って、遅まきながら運営委員会などのチェック&アドバイス体制の整備や活動の情報公開に力を入れつつあります。継続的な活動のためには、透明性のある組織づくりを通じて広く社会に支えられることが必要だと思うからです。

STORY 11 ネットワークの光と影

活動には、ネットワークは役立ちます。でも、不安もあります。

「仮設住宅支援のネットワークを設立するんですが、一緒にやっていただけませんか」。仮設住宅に住む被災者の生活を支援する地元NGOの責任者が、ミッチーたちの事務所を訪ねてきた。「情報交換と物資・ボランティアの融通が主な目的です」その責任者は言った。ネットワークの力は大きい。災害直後の活動で他の団体と助け合った経験もあり、意義も充分理解している。しかし、ネットワークという響きの心地よさとは裏腹に、地味な事務処理や団体間の調整のむずかしさから、加盟団体同士が決裂しお互いを批判し合う醜さを何度も見てきた。ネットワークとは、本来、お互いが主体的に関わる中で威力を発揮するのにもかかわらず、集まってくる団体の中には、加盟すれば活動基盤(人・資金・物資など)の弱さを補える、何かおいしい話がある、というような「ネットワークぶらさがりタイプ」の団体が多いのも事実だった。慎重な検討がなされた。3日後、ミッチーたちはネットワークへの参加を決めた。自分たちの組織の性格上、信頼できる地元団体との連携は不可欠と考えたのだ。

①●被災地では自然発生的に様々なネットワークが組まれました。なぜネットワークが必要になったのでしょう。
②●他団体とのネットワークにはどのようなメリット・デメリットがあると思いますか。
③●平常時のネットワークは災害時にも生かされるでしょうか。

◆解説と提言

草地賢一(阪神大震災地元NGO救援連絡会議／代表、姫路工業大学環境人間学部教授)
●PHD協会総主事、神戸NGO協議会代表として、被災地最大規模の救援と生活再建支援ネットワークの運営に携わる。

支援団体ネットワーキングの必要性と問題

1月17日午前中、地震の惨状を見た瞬間私は大規模な救援活動が必要だと直感した。翌18日は1日中ワゴン車に水や米などを積んで、東灘から兵庫区まで関係者の安否確認と被災地の状況を観て回った。そして19日午後2、3の友人に働きかけて連絡会議を結成し、それを県と市の災害対策本部に通告した。この時点で何をするか、何ができるかが明確だった訳ではない。ともかく救援活動のネットワークが必要とだけ考えていた。

ネットワーキングが立ち上がってきた時、わたしはディレクター(方向指示者)ではなく、コーディネーター(調整者)として振る舞うことに終始した。ネットワーク全体を牽引する強力なリーダーシップを持つべきだと批判も受けたが、コーディネートすること(対等)に徹した。それは、連絡会議に集まってきた様々なグループが既にそれぞれの救援現場で状況に応じて活動をしており、彼らの働きがスムースに展開されると同時にグループ間の連絡調整が必要だと感じていたからである。

しかし、連絡会議とその中で組織された分科会が育ってくる時、それを自分の組織などに取り込み、特定の個人が仕切ろうとする動きも出てきた。これに対しては、本人と直接談判し即座に退いてくれるように申し入れ、断固として対処した。また、このネットワークを利用して金儲けを企む輩に振り回され閉口した。

災害援助のネットワークは救援段階など状況の見極めが大切である。瞬間の場合、一定の時間が経ってから、あるいは数か月・半年経過した場合と状況は様々に変化する。それに応じて対処の内容も自ずと変化する。この点ではディレクターシップ(＊1)が必要である。とくに緊急支援のネットワークはその終了時期をどう設定し、撤退するか、つまり引き際が重要である。

最後に一言、ネットワークは人である。リーダーたるものは人を見抜く能力が大切である。知らない人々と組むネットワークは面白い。緊張の中で人との出会いを喜ぶ余裕を持ちたいのだ。

(＊1)方向支持者としての指導力・統率力

◆一口コラム

殿本弘(東灘・地域助け合いネットワーク／副代表)
●震災直後より被災者支援活動に参加。95年11月にボランティア団体「わかちあい阪神」を立ち上げ、通院送迎サービスを中心に活動。96年2月に発足した「東灘・地域助け合いネットワーク」の設立メンバーでもある。

主義主張を越えて

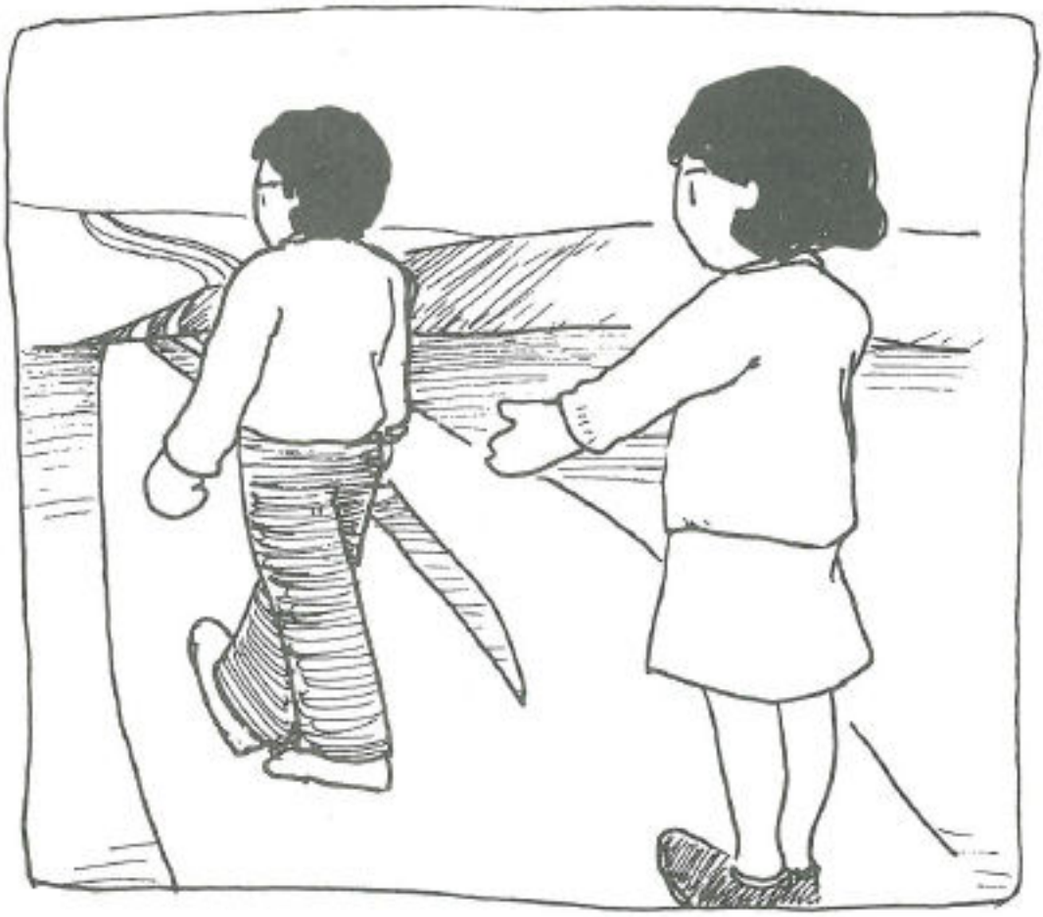
私のボランティア活動は震災当日から始まった。地震直後、近所から火災が発生。消防車の応援も来ず、近くの側溝を流れる水をせき止め、近所の住人を集め、バケツリレーで類焼をくい止めた。その後、避難所の炊き出し、安否確認などを経て「東灘・地域助け合いネットワーク」結成に参加した。

個人ボランティアは自由でマイペースな気安さはあるが、個人の責任・負担が重く、効率も悪い。緊急に多くの支援を必要とする震災の様なケースでは、規模と効率の面でグループの行動力には及ばない。多くのチームがネットワークを組んで行動することで、地域エリアを越えた多彩な活動も可能になった。反面、ボランティアには強いキャラクターの持ち主が多く、しばしばグループ内の紛争やネットワーク間の意見の対立を引き起こしてきた。個人の主義・主張を超えたボランティアの連携なしに地域NPO/NGOの第三セクター(*1)としての今後の大きな成果は期待できないし、市民の要請に応えられるネットワークの構築は不可能であろう。

(*1)行政でも民間でもない、第三の部門。半官半民的性格の団体・組織をさす。

STORY12　いつ引くか

撤収を決めたミッチー。しかし、「震災は終わらない」との思いが胸に込み上げます。



地震から１年がたった。「私たちがいつまでもお手伝いしていてよいのでしょうか」。３日前に帰ったボランティアの言葉が、ミッチーの頭から離れなかった。被災地には生活のペースが戻り、震災は過去のものになりつつあった。問題はすべて解決したわけじゃない。仮設住宅の孤独死、職を失った被災者の雇用、肉親を失った人の心の傷、土地・建物にからむいざこざ……。力のない人、弱い人ほど、網の目からこぼれ落ちるように、復興から取り残されていた。この国の福祉政策、社会文化の縮図がここにあった。震災の前から、日本社会が抱えていたひずみや矛盾が、鮮明な形で噴出し、どうにもならない状況で定着しつつあった。短い時間で解決できる話ではなかった。コミュニティーが自力で地道に取り組むしかなかった。外からの支援も、公的な制度も解決の担い手にはならないのだ。「そろそろ潮時か」。先輩スタッフの言葉に、ミッチーは「そうですね」と一言つぶやいた。二度目の冬が訪れていた。

考えてみるゾウ

①●被災地からの撤退を決めるとき、あなたなら何を判断の基準にしますか。
②●阪神・淡路大震災はあなたにどのような教訓を残しましたか。

◆解説と提言

横山明泰(愛知県社会福祉協議会)●全国の社協ネットワークによる支援活動の拠点づくり(現地事務所の立ち上げ)のため、1月下旬から2月上旬まで西宮市に赴く。主な活動として、避難所などでのボランティアコーディネートのシステムづくり、高齢者や障害者などの個別のニーズの把握やその福祉的支援に携わり、その後は後方支援にまわる。

始めるとき…止めるとき

震災直後の生命救助から始まったボランティア活動も、ライフライン(＊1)の復旧、仮設住宅の建設、地域コミュニティー(＊2)活動の再開などに伴い、救援ニーズの量も質も大きく変化し、それに伴い活動の内容も変動していったと言われています。

この章のケースのように「潮時を感じる」というように、活動を続けることに困難さを感じるとき、自分たちの活動のあり方を見直すいい機会とも言えます。さらに、変化するニーズに対応できなくなってきた時には、活動自体を終わらせる時期になってきているかも知れません。

災害時のボランティア活動の終わり方には次のようなものがあると思います。一つは、活動資金や人員の確保などの困難により、続けることができなくなったとき。また、活動を続けていくことが目的となり、終息の時期を見失ったもの。状況の変化を的確に判断して、必要に応じて終了していくもの。できれば、外部からの支援を必要としなくなる時点で、合理的に撤退したいものです。

そのためには、自分たちが、どのような目的で、何が得意で何ができるか、そして、何を求められているかを、理解しながら、その地域の状況がどのようになるまで、支援すべきかを意識しながら、活動したいものです。

目的や計画が、きちんとできていて、状況を正しく把握できれば、撤退の時期は、自ずと見えてくるものかも知れません。しかしながら、止む終えず活動を縮小や中止しなければならない時でも、必要なことを地域にゆるやかに引き継いでもらえるよう考えていきたいものです。

(＊1)電気、ガス、水道　(＊2)地域社会、共同体

◆一口コラム

市川斉(シャンティ国際ボランティア会／ＳＶＡ)
●95年1月下旬から約2年半、SVA阪神大震災救援本部現地責任者として、主に兵庫区、長田区で活動。阪神・淡路大震災「仮設」支援NGO連絡会(現被災地NGO協働センター)の事務局長など、復興支援活動にたずさわるNGOのネットワークづくりにも関わった。

SVAはなぜ継続し、なぜ撤収したのか

活動終了までにシャンティ国際ボランティア会(SVA)は活動を３回延長した。１、２回目の延長時(95年春)は被災者の仮設住宅への移動が始まっていた時であった。随時、救援プロジェクトを終了させていったが、新たな問題が予想された仮設住宅での活動、福祉行政に取り残された高齢者との関わりなど、簡単に活動を終了できないプロジェクトもあり４か月ほど活動を継続した。そして震災後７か月、活動と資金を地元に引き継いで終了する予定であったが、適当な相手が見つからず、やむを得ず延長。１年以上かけて、地元の人を中心とした受け皿を作り、活動開始から２年４か月経過した97年５月に神戸事務所を閉鎖した。

ＳＶＡが２年以上被災地に残った最大の要因は、災害救援から日常の社会的問題にまで関わってしまったからに他ならない。関わった以上、放棄できない責任があった。はじめから日常には一切関わらないというスタンスであったら、２～３か月で撤収していたであろう。

今でも気になっていること、それは95年の春、多くの被災地外の団体が「これからは被災者の自立だ、出番だ」という大合唱と共に撤収したこと。この時期の撤収に問題があるというのではない。しかし、本来よそ者が偉そうに被災者の自立を語ることはおこがましいし、撤収理由は自分たちの行動指針・哲学に求めるべきものであるはずだ。だが、風潮に流されたとしか思えない撤収が相次いだ。そこに、日本の市民活動の脆弱さを感じることは考えすぎなのだろうか？